東南アジア研究　40巻4号　2003年3月

現地通信

ミャンマー社会雑感

藤　田　幸　一*

2000年12月から1年間，ミャンマー（ビルマ）の首都ヤンゴン（ラングーン）に長期滞在する機会を得た。農業灌漑省・農業計画局派遣のJICA専門家（農業生産政策）としてである。海外での長期滞在はバングラデシュ（1992年3月から2年間）に続き2度めであったが，今回は現地語を習得する余裕もなく，社会観察も浅くならざるを得なかったが，現地でそれなりに考えたことを書き綴ってみたい。

ミャンマーは，静寂なパゴダで祈りにふける温和で平和な人々の国である。観光パンフなどでは，微笑みの国といった謳い文句が人の心をとらえる。実際，ミャンマーを訪れる多くの日本人は，そういうミャンマーに遭遇して感激し，「ビルメロ」（ビルマ大好きでメロメロになること）になって帰ってくる。筆者も，路上の果物（マンゴスチン）売りに，値段を訊いて言葉が通じないので仕方なく，袋に適当に詰め，200チャット札を渡したことがあるが，袋にいっぱいになるまで詰めてくれ，それを受け取って帰ろうとすると，お釣りだよと，50チャット札を渡されたときは，そのあまりのヒトの良さに驚き感激したものである。治安も抜群に良い。暗くなってから女性が一人歩きしても平気である。

ミャンマーの人々は争いごとを忌み嫌う。また「Noといえない日本人」以上に，Noをいわず，協調を重んじる人々である。それが嵩じると，外国人には不可思議な存在に映る。たとえば次回会う日時を約束すると，どことなくもじもじと「いいよ（ヤー・バー・デー）」といって，実際にすっぽかされたという話がよくある。なぜはっきりNoといってくれないのかと周囲のミャンマー人にこぼすと，Noといえば失礼だからなのですと真剣に諭されるのである。Noといわなかった以上，日本人であれば無理をしても来るであろうが，来ずに裏切ることよりも，Noという方が失礼であるらしい。もちろんこれは，いい悪いの問題ではなく，そういう文化だということである。

以上のような文化的特質は，ミャンマーにおける「お上」と国民の関係，あるいは組織内の人間関係にも一脈通じるところがあるように思われる。「お上」は絶対であり，いかに不条理であろうと逆らうことはない。だがそれはしばしば「面従腹背」になる。また地位が下の者は，命令には従うが，一方，人前で叱られたりして恥をかかされると決して許さない高いプライドがある。恥をかかされたとなれば，顔面上部がくっきりとした線で陰る「ちびまる子ちゃん」状態になり，「面従腹背」は決定的になる。

ミャンマーの現SPDC政権は，誰がみても明らかにおかしい間違った経済政策を次々に挙行している。しかし人々はただひたすら耐え忍び，また心ある官僚組織のトップの行政官も，決して上司（軍人に限らない）に正論を進言することはせず，ただ忍従するというような状況が広範にみられる。

以下の筆者滞在時に起こった米価暴落時の米穀政策が，最も端的な例の一つである。

ミャンマーの籾価（1バスケット当たり）は，1999年11月に約800チャットでピークをつけてから暴落した。2000年8月までに半値の約400チャットまで下落，以降2001年10月頃から値を戻しはじめるまで1年半以上の長期にわたって，米価が極端に低い状態が続いたのである。

こうした米価の低迷は当然，稲作農家に大きな打撃を与えた。筆者は2001年6月，ミャンマーの穀倉地帯であるイラワジ・デルタの米どころの農村に調査に入ったが，そこで見聞したことは，昭和恐慌時のわが国の農村を彷彿とさせるものであった。農産物価格は暴落する一方，化学肥料やディーゼル油などの投入財価格はむしろ上がるという，いわゆる

* Fujita Koichi, 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

シェーレ（鋏状価格差）である。

調査村では，稲の二期作化を推進する政府の政策にのって，1990年代半ば頃から，村総出の労働力出役で排水路整備を行い，乾期に排水路に溜まった水をディーゼル・ポンプで揚げて乾期稲作が可能になっていた。乾期稲作に適した品種が導入され，化学肥料も増投されて，年間総収量は飛躍的に向上し，農村経済は上向きの順風満帆にあった。しかし，上記の2000年米価暴落は，特に高投入高産出型の乾期稲作を直撃した。2000年雨期稲作の収穫時に米価暴落でほとんど余剰が残らなかった農家は，次の乾期稲作の作付けを大いに躊躇ったのである。

しかし政府は，乾期稲作の作付けを強制した。農家は，作れば家族労働費はおろか経常投入財の現金支出すら回収できない恐れがあることを熟知していながら，命令に従わざるを得なかったわけである。作付面積を多少減らすとか，「荒らし作り」するとかなど消極的な抵抗はみられたが，多くの農民は，乾期稲作を実際に行い，損害を被ったのである。2001年6月の調査は，そうした乾期米の収穫が終わり，次の雨期稲作の田植えがはじまる頃で，にもかかわらず米価は暴落したままという，最悪の時期に実施したことになる。村長は，政府と農家の板挟みにあって，悲痛な痛みにただ耐え忍んでいた。まるで嵐が去るのを，首をすくめて待つかのように。

ミャンマー政府は，1年半以上もの長期にわたる米価暴落という一大事に対して，結果的には全くの無為無策に終始した。当時，バンコクの国際米市況も著しく低迷してはいたが，それでもミャンマー国内米価は国際米価の半分以下であり，輸出しようと思えば，十分にできたであろう。しかし民間業者に輸出は認められておらず，米輸出独占機関であるミャンマー農産物交易公社も，例年通り，公務員への配給向けの雨期米供出（面積当たり一定量）を農民に課すのみで，国内にだぶついた米を買い上げ，貯蔵するなり輸出に回すなり，といった措置は全くとらなかったのである。それどころか，上記のように，嫌がる農家に乾期米の作付けを強制した。2001年6月調査時に，イラワジ・デルタ調査村近くの小さな町で質屋の蔵をみせてもらったが，そこには，揚水ポンプのディーゼル・エンジン，牛車の車輪，鉄製の馬鍬，自転車などが所狭しと並んでいた。金（きん）の他，こうした生産・生活物資を質草にしてまで月利3％の資金を借り，稲作を続けなければならなかった農民が多数いた証拠である。

他方，シャン州やタニンターリ管区といった米生産に適さない地域で，ミャンマー政府は，米の地域内自給化政策を強く推進している。こうした政策は当然，シャン州やタニンターリ管区の農民にとっては災難でしかないが，それが米輸出禁止体制の下では国内の米供給量を増加させ，米価を下落させる効果をもつことになり，イラワジ・デルタなどの米どころの農民にも不利益になることは明らかであろう。しかし，2000年の米価暴落時にも，こうした米の地域内自給化政策は，何ら変更されていない。

なぜ農民や農業灌漑省の官僚達は黙っているのだろう。滞在中，このことが気になって仕方がなかった。軍政の締め付けがきついからだという説明では，到底納得できない何かを感じざるを得ないのである。

首都ヤンゴンに滞在中，週末は暇である。暇にまかせ，日本人会の図書室に通って，片っ端から本を読んだ。ビルマ兵として敗走中終戦を迎え，在ヤンゴンのイギリス軍収容所生活を2年弱余儀なくされた体験談で実に痛快な読みものである，会田雄次『アーロン収容所』（中公新書）にもはじめて接した。また司馬遼太郎の『竜馬がゆく』も読んだ。坂本竜馬，武市半平太，中岡慎太郎，西郷隆盛などなど，数え切れないほどの志士が，高い志半ばにして討ち死にしていったことに，悲痛で深い感銘を覚えた。

勢い余って，ミャンマーの人々の中にこうした志士が少しでもいるのか，情けない限りであるなどといったことを，日本にいる友人達に書いた。当然のことながら，大変な反論にあって，あっけなく討ち死にをした。

温和で争い事を嫌い，ひたすら耐え忍ぶミャンマーの人々ではあるが，1988年には周知の通りの激しい民主化闘争が燃え上がった。ミャンマーの人々の隠れた闘志がいつか再び発火点に達し，大きな政変を勝ち取って，将来のよりよきミャンマー国を築き上げるのか否か，いまは誰にもわからない（ただし，軍政云々以上に根深い問題があり，ミャンマー社会はそれを乗り越えていかねばならないであろうとの思いも強くする。しかしこの点は，また稿を改めて論じたい）。